

高校サッカー応援マネージャー公開脱糞。国立ウンコ事件

高校サッカーの応援マネージャーの北池麻里奈は、額に冷や汗をかいていた。

この日は、大事な全国高校サッカー選手権大会の決勝戦。

14時から始まる決勝戦を前に、北池麻里奈は生放送の番組に出演していた。

「応援マネージャーの北池麻里奈さん。この後の決勝戦、楽しみですねー」

実況のアナウンサーに話を振られて、北池麻里奈が話し出す。

「そうですねー、両チームとも素晴らしい試合をここまでしてくれています。白熱した決勝戦にしてほしいなと思います」

「ありがとうございます、北池さん」

キックオフ前の生放送が終わり、北池麻里奈は一旦放送ブースを後にする。

北池麻里奈は、自身のマネージャーの元に近付いていき、小声で耳打ちする。

「ちょっとお腹が痛くなってきたんですけど」

「えっ、大丈夫」

北池麻里奈の担当の女性マネージャーは心配そうに北池麻里奈を見つめる。

北池麻里奈と同じく小声で話す。

「トイレ行っと思ったら。次の出番はハーフタイムのときだけど、それまでは、まだ45分くらいは

あるんだから」

「そうですよねえ。でも、今すぐトイレに行っても、出ないような感じがしてるんです。かといって、このお腹の痛みは引きそうにないですし」

マネージャーは依然心配そうな顔を浮かべていた。

「そっか。でも、トイレに行きたくなったら、すぐに言ってね。できたら、前半の内には行っという方がいいと思うから」

「わかりました」

北池麻里奈はそう答えながら、決勝戦を観戦する。

けれども、お腹の痛みのことがあったので、サッカー観戦にそれほど集中はできなかった。前半が30分ほど経過したところで、マネージャーが耳打ちする。

「どう麻里奈ちゃん、お腹の方は」

「はい、まだ痛みはあって、出しときたいんですけど、なんか今は出なさそうです」

「そっか。じゃあ、ハーフタイムはこのままがんばろっか。そろそろ準備しないと」

「わかりました」

こうして北池麻里奈はハーフタイムの生中継の準備に入った。

北池麻里奈はかなりの危機感を持ちつつ、準備に取り掛かっていた。

もし、生中継中に強烈な便意を催したらどうなるのだろうか、と。

北池麻里奈のお腹の痛みは間違いなく下痢だった。

それは北池麻里奈自身がよくわかっていた。

出せるものなら早く出したい。

それでも、それをコントロールすることは難しい。

いざ、そのタイミングがきてしまうと、強烈な便意が襲ってくることになる。

その便意が生中継中に来ることはないだろうかと、冷や冷やしていたのだ。

そんなことを考えると、また、便意が一段と増したようにも感じる。

(今から行こうかな。でも、もうダメだよね)

もうハーフタイムの中継の準備に入るので、今からはもうトイレには行けない。

そう思うと、また、お腹がきゅるりと差し込むような痛みを感じる。

「北池さん、大丈夫ですか。なんか顔色が」
テレビ局のスタッフが心配して、北池麻里奈に声をかけてきた。

「はい、ちょっとお腹が痛いんですけど、大丈夫です」

北池麻里奈は苦悶の中でも、笑顔を見せながら、そう言った。

前半が終わり、ハーフタイムの生中継が始まった。

また実況のアナウンサーから話を振られる。

ギョルルン、ギョルギョルルン

自分の話す番になると、またさらに、お腹の痛

みと便意が襲ってくる。

(ヤバい)

北池麻里奈はそう思いながらも、笑顔をたたえながら、生放送のカメラに映っている。

「さー、応援マネージャーの北池麻里奈さん。0-0の前半はどのようにご覧になりましたか？」

「はい、そうですね。両チームとも、素晴らしいサッカーをしていて、さすがに決勝戦だなというふうに思いました。後半も楽しみです」

「そうですね。前半は、どのように感じながらご覧になっていましたか？」

アナウンサーが北池麻里奈にさらに質問を重ねてくる。

「そうですね。本当に緊迫感があって、緊張してお腹が痛くなってくるくらいでした」

「そうですかー。そうですね、両チーム全国制覇の夢がかかっている試合ですからねえ」

キリリ、キリリ

北池麻里奈の体内では、腸を動かす力が無常にも力強く働き続けていた。

さっきまでは歓迎していたその躍動する力が、今は北池麻里奈を窮地に追い込む。

全国に生中継中、しかも、大勢の人の前でウンコを漏らしてしまわないように、肛門に力を入れながら、笑顔を保ちつつ、カメラに映り続ける。

視聴者は誰もこの笑顔が、排便我慢顔だとは思っていないだろう。

「それでは、最後に応援マネージャーの北池さ

ん、両チームに向けて、応援メッセージをお願いします」

最後にアナウンサーが北池麻里奈に話を振った。

「はい、両チームの選手の皆さま、最後の力を振り絞って、優勝目指して頑張ってください」

北池麻里奈は右手で拳をつくりながら、笑顔でそう言った。

「ありがとうございます。それでは、まもなく後半戦です」

ハーフタイムの中継がなんとか終わった。

北池麻里奈はマネージャーの元へと駆け寄った。

「ヤバい。もう出そう。今からトイレに行きます」
北池麻里奈はそう言った。

急いでいたので、周りの人にも聞かれてしまうくらいの声量だった。

「うん。わかった」

マネージャーはそう言った。

「私も途中までついていくわ。でも、トイレ、空いてるかなあ」

北池麻里奈とマネージャーは、放送ブースを飛び出して、一番近くのトイレを目指した。

まだ、ハーフタイム中なので、当然、観客の人、大勢トイレに行きかっている。

トイレを済ませて観客席に戻る人と、これから行こうと思っている人が大勢ごった返している。

「あっ、北池ちゃんだ」

「マジで。おおっすげー」

「やっぱかわいいなー」

「こんなに近くで見れるなんて」

近くの人が北池麻里奈に気付いた。

スマホで撮影している人もいる。

北池麻里奈はそんな声に応えることも、カメラでの撮影を注意することもなく、一目散にトイレを目指していた。

前を急ぎ足でいく、マネージャーについていく。一番近い女子トイレに着いたけれど、案の定、すごい人ばかりだった。

トイレを待つ列が、女子トイレの外にまで、続いている。

トイレの順番が来るのはこれから、一体、何分後になるのだろうか、北池麻里奈は絶望を感じた。

「麻里奈ちゃん、大丈夫？ここだと、あと、15分くらいはかかりそうだけど、大丈夫？」

マネージャーが振り返り、小声で尋ねた。

「ちょっと無理そうです」

北池麻里奈は消え入るような小声で話した。

小声で話さないと、周りにいるファンに会話を聞かれてしまう恐れがあった。

「どうしよう、どうしよう」

マネージャーはそう言いながら、列の前の方を見るけれど、よい策は浮かばない。

北池麻里奈が芸能人だからといって、トイレの順番待ちの列を譲ってもらうというわけにもいかなかった。

するとそこへ、テレビ局の男性スタッフが走り込んできた。

すぐにマネージャーと北池麻里奈に耳打ちする。

「トイレですよ。調べたところ、少し向こうのジェンダーレストイレだと、ここよりは、少しは空いているみたいです。もし、急ぎなのなら、そっちに行った方がいいかもしれません」

北池麻里奈はマネージャーと視線を合わせた。「どうする？」

マネージャーがそう尋ねてきた。

「そっちに行きます。もう、かなり限界です」

北池麻里奈はそう声を絞り出した。

3人で少し離れたジェンダーレストイレの方向を目指して、また、小走りで移動し始める。

「おっ、麻里奈ちゃん、移動するみたいだな」

「俺たちもついていこうぜ」

北池麻里奈のことを見つけた男性ファンたちも同じように移動していく。

もうすでにハーフタイムは終了して、後半が始まっていたけれど、男性たちにとってみれば、サッカーの試合なんかよりも、刺激的な光景が目の前に広がっていたのだ。

状況と、雰囲気から察するに、北池麻里奈はトイレに行きたがっている。

大か小かはわからないけれど、明らかにこらえるような表情を浮かべている。

そんな北池麻里奈の様子に、男たちは、興奮していたのだ。

北池麻里奈は現在 17 歳の美人女優だ。

高校サッカーの応援マネージャーは代々、若